東郷の歴史 シリーズ 17

東郷の鬼瓦 1

日本建築の屋根の上に厄除けと装飾の役割で使われてきた瓦は、建物の美しさを際立たせています。その中で特に意匠をこらして屋根全体を引き締めているのが、大棟の両端にある鬼瓦でしょう。三州瓦で代表されるように愛知県では、多くの建物に瓦が使用されてきた歴史があります。

町内のお寺や神社、地区集会所などでも多くの鬼瓦が飾られていました。そういった鬼瓦類で町の郷土資料館に収蔵されている瓦をご紹介します。

元 部田山の集荷所「鬼瓦」

通称「部田山の牛乳屋さん」のすぐ横にあった小屋「部田山集荷所」①の屋根に葺かれていたものです。

その場所は、現在の県道名古屋岡崎線「三ツ池」交差点の辺りでした。

昭和56年(1981)に崩壊寸前だったため、屋根から取り外され町に寄贈されました。

新№1066(旧№56-3-1)　高 42 ㎝、横 60 ㎝

この鬼瓦は、江戸時代に制作されたものと考えられますが、建物とともにいくつかの場所を移転してきた歴史があります。

明治初年までは、集落内の「春木字西前」の地に建っていて、「芝居」の練習場③として使用されていましたが、明治初年頃に東光寺のすぐ東側へ移転し、「集会所及び祭ばやし」の練習場②として使用されていたそうです。

その後、昭和3年(1928)頃に部田山(牛乳屋横)へ移され、野菜・肥料・繭などの集荷所①に使われるようになったそうです。

なお祭りばやしは、「部田の祭ばやし」として、昭和54年に町指定無形民俗文化財に指定されています。

新№1171(旧№56-3-5)

新№1172(旧№56-3-6)

なぜ「芝居」なのか？　江戸時代や明治時代の頃の庶民の楽しみといえば、歌舞伎や萬歳などの演芸が主流でした。

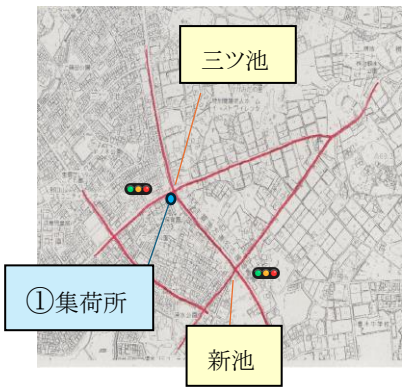
歌舞伎といえば諸輪集落では、観音寺の御開帳(17年毎)に併せて披露される「こども歌舞伎」が、昭和50年代まで伝承されていました。次の御開帳は令和8年の予定です。

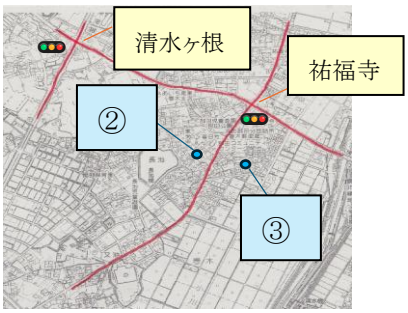
また萬歳(万歳・万才)では、尾張「萬歳・御殿萬歳」などと呼

ばれて県内各地で伝承されていますが、その一つとして「三曲万才」が部田地区に伝承されていました。「三曲万才」は、3つの楽器（胡弓・鼓・三味線）を演奏しながら演ずる郷土芸能です。

季節の行事の際、特にお正月は、各家々を回って地域に福と笑いを振りまいていたようです。

平成22年頃まで伝承されていました。





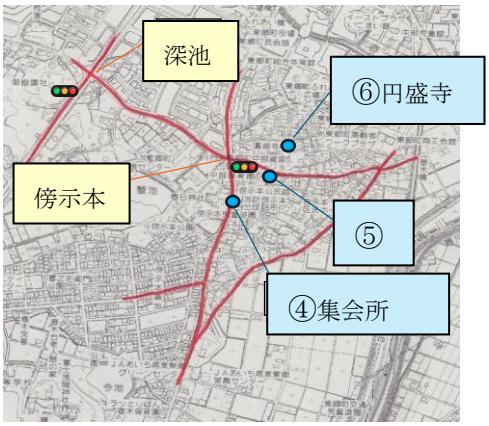
傍示本の元青年会集会所「鬼瓦」

新№1067（旧№56-54-1&2）
高　43.5 ㎝、横　51.8 ㎝

この瓦は、昭和51・52年頃まで傍示本春日社の前（県道付近）にあった傍示本青年会の集会所④の屋根に葺かれていた鬼瓦だそうです。一時は繭の集荷所や馬道具などの倉庫にもなっていたそうです。屋根から外された後、現傍示本公民館のすぐ横にあった農協購買部（現在の Ａ コープ倉庫の建っている場所）に保管されていましたが、昭和56年に町へ寄贈されました。

瓦の年代は不詳ですが、集会所が建てられたのが大正4・5年頃と伝えられています。

なおこれ以前の青年会の集会所⑤は、字北所屋敷の「火の見櫓（やぐらり）」の辺りにあったそうですので、瓦の年代は、大正期以前とも考えられます。



傍示本の円盛寺「鬼瓦」

新№1119－1
高　45.5 ㎝、横　60 ㎝

こちらも傍示本区長から寄贈されたものです。円盛寺本堂⑥は、昭和4511月に再建されています。

従前の旧本堂は、安永7年（1778）再建なので、写真の「鬼瓦」は、安永7年に屋根に葺かれた瓦でしょう。

上下の牙が特徴的で凛々しい面相をしており、瓦の足の部分のデザインも引き締まった感じを受けます。屋根の大棟を引き締めていた情景が浮かびます。

R6.9.9 追記修正